普通の風景に潜む　人と自然の共生

２００７年2月１７日（土）から6月１０日（日）まで開催する企画展「共生の風景～古写真にみる暮らしと自然～」では、兵庫県の各地の古い写真（古写真：明治から昭和中期頃までの写真）を見て、今では少なくなった人と自然の共生を考えます。もちろん古写真には自然だけではなく人も写っていますから、自然と共生していた当時の暮らしについてもわかる内容になっています。

博物館の常設展示では、植物や里山、昆虫、魚、岩石など様々な自然や生き物が紹介されています。この自然や生き物は、全てが個々に生きているわけではなく、中には人がいたから生えている植物や、人と一緒に暮らしていた生き物もいるのです。そんな人と自然の共生を、カメラという目を借りて、古写真に写っている普通の風景から見つけ出すことが、この企画展の一つの狙いです。見つけていただいた後に常設展示をもう一度観ていただくと、新たな発見があると思います。

もう一つの狙いは、現在の風景の中にもわかりにくいけど存在している、人と自然の共生を考える“きっかけ”を作ることです。下の写真（表紙にも使用）のような見事な「塀越しの桜」は今ではなかなか見られませんが、代わりに見事な街路樹が新しいまちにも植えられています。この街路樹が元々は「塀越しの緑」だったことを知っていると、「広い道路だけじゃなく、家が並ぶ狭い道にもあった方がいいな」、「最近はガーデニングに凝っているけど、一本樹も植えてみよう」という風に考えが広がっていきます。

表紙や企画展ポスターなどに使用している「Japan」（1888年発行）掲載の古写真。外国人が自国で日本を紹介するために撮影したものです。

当時、日本には街路樹はほとんど無く、写真の「塀越しの緑」や軒先園芸が美しい町並みをつくっていました。この時代には多くの地理学者が日本に来て、「日本では山が美しく管理され庭には様々な花が咲いている」と絶賛しています。

人と自然の共生と言っても、色々なものがあります。今回の企画展では、人と自然の共生を次のような視点で考え、古写真や写っているものの実物を展示しています。

自然に沿って暮らす

複雑な地形に沿ってできたまち、峠や川で不便だから発展した宿場など

自然の力に従う

土や水が流れる力を利用した植林や水路（サイフォン）など

生き物と共に暮らす

養蚕（カイコの養殖）、牛の放牧，漁業と農業のつながりなど

自然の恵みを活かす

身の回りの植物を使った染め物、豊富な水を利用した水車など

自然を愛でる

海外でも絶賛された日本・兵庫の名所の風景

この他にも、人が入ることができる巨大カメラを展示するので、風景を切り取る体験もできます。古写真とあわせて、日常の風景を今までと少し違った視点で見ていただければと思います。

（自然・環境マネジメント研究部　赤澤宏樹）

同じく「Japan」掲載の古写真。斜面を押さえるために、大きな石を竹で組んだ「粗朶」を使っています。真ん中の人物が座っている所が粗朶です。

今のようにコンクリートで固めてしまわず、このような隙間がいっぱいある方が、後に土がたまり、草木の根が張り、生き物のすみかになります。生き物と共生する環境作りの見本の様な風景です。